

# 秋冬

～八十八の星座をなぞる～

第二章

# 目次

## 秋の星座

|          |     |         |     |
|----------|-----|---------|-----|
| アンドロメダ座  | 六貢  | とかげ座    | 十二貢 |
| うお座      | 七貢  | ペガサス座   | 十三貢 |
| おひつじ座    | 七貢  | ペルセウス座  | 十四貢 |
| カシオペア座   | 八貢  | ほうおう座   | 十五貢 |
| くじら座     | 九貢  | みずがめ座   | 十六貢 |
| ケフェウス座   | 十貢  | みなみのうお座 | 十七貢 |
| こうま座     | 十貢  | やぎ座     | 十八貢 |
| さんかく座    | 十一貢 | ろ座      | 十八貢 |
| つる座      | 十一貢 | 秋の大四辺形  | 五貢  |
| ちょうこくしつ座 | 十二貢 |         |     |

## 冬の星座

|          |      |          |      |
|----------|------|----------|------|
| いっかくじゅう座 | 二十二貢 | きりん座     | 二十七貢 |
| うさぎ座     | 二十二貢 | こいぬ座     | 二十七貢 |
| エリダヌス座   | 二十三貢 | はと座      | 二十八貢 |
| おうし座     | 二十四貢 | ふたご座     | 二十八貢 |
| おおいぬ座    | 二十五貢 | 冬の大三角    | 二十一貢 |
| オリオン座    | 二十五貢 | 冬のダイヤモンド | 二十一貢 |
| ぎょしゃ座    | 二十六貢 |          |      |

|      |      |
|------|------|
| 参考文献 | 二十九貢 |
|------|------|

## 前書き

この冊子をお手に取っていただき、ありがとうございます。この冊子は三冊に渡って全天にある八十八の星座を紹介したものです。この冊子には星座と、それに属する星座や知識を載せています。ぜひ、堪能してください。また、星座は様々な結び方がありますが、その中でも私が選んだものを紹介しています。あらかじめご了承ください。

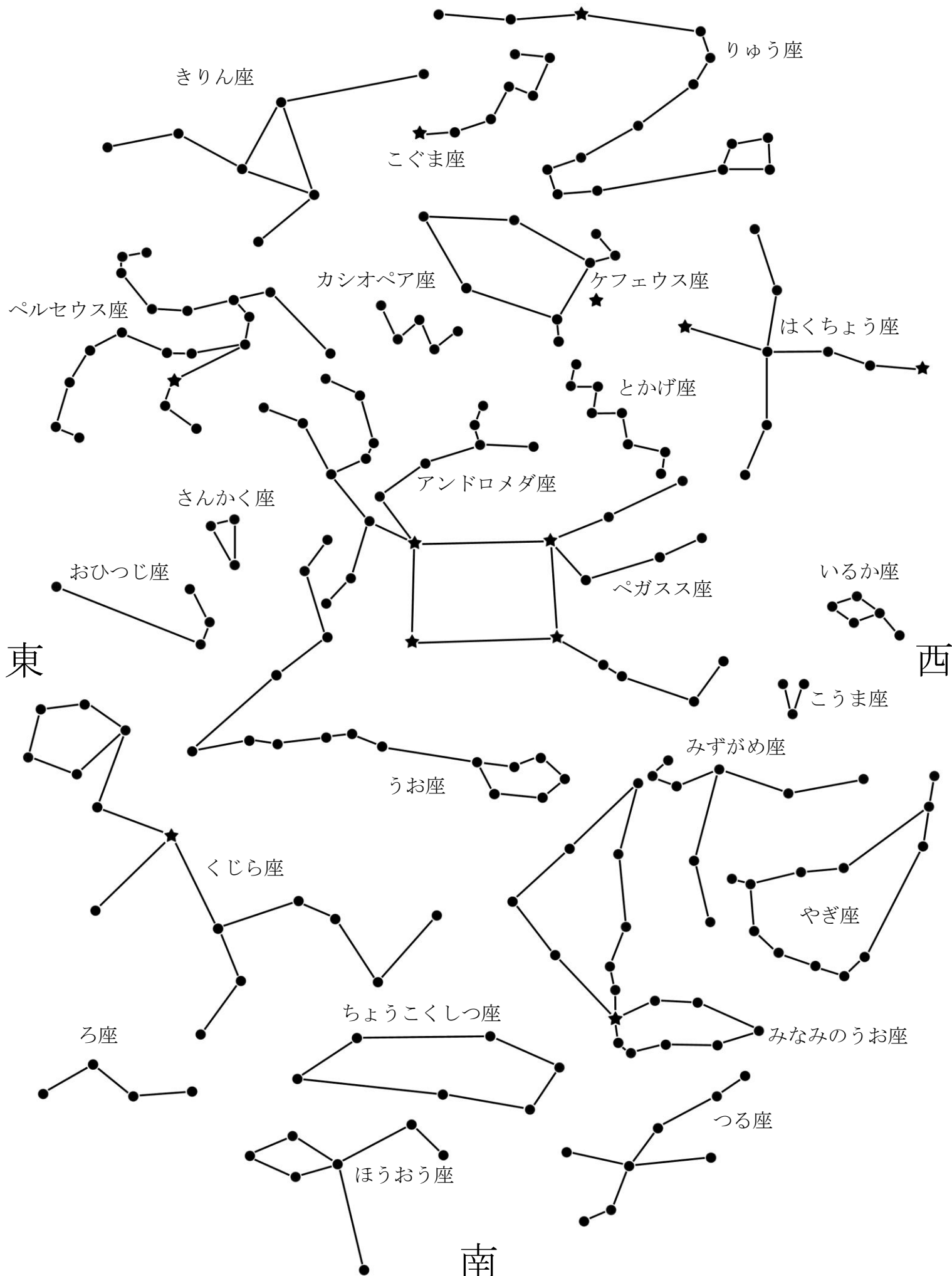
秋

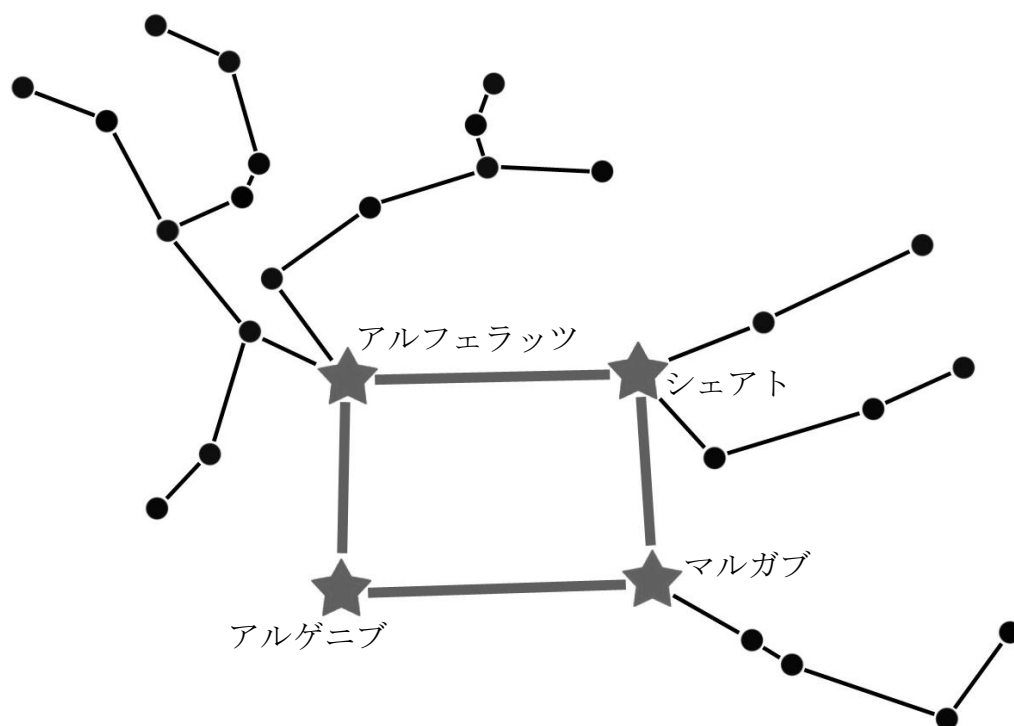
北

東

西

南





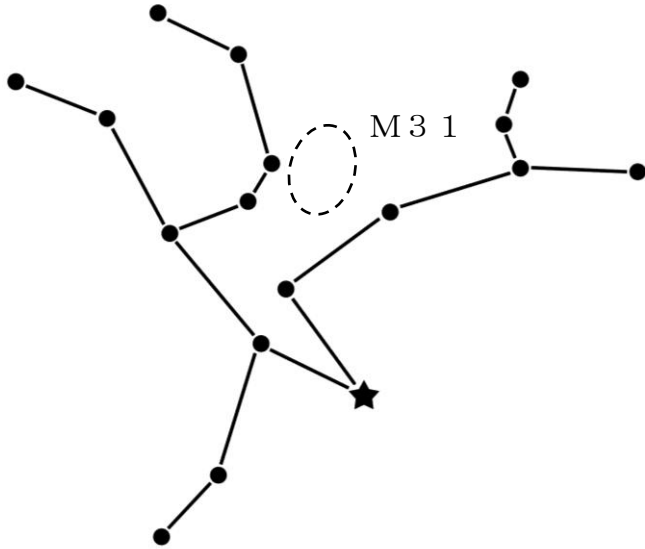
## 秋の大四辺形

『秋の四辺形』『ペガサスの四辺形』『ペガサスの大四辺形』など、さまざまな呼び方がある星の並び。あまり明るい星がない秋の夜空に綺麗な四角形を描き出す。星の名前はアンドロメダ座の星から時計回りにアルフェラッツ、シェアト、マルガブ、アルゲニブである。

エニフは元がアンドロメダ座とペガサス座の二重所属であったが国際天文連盟がアンドロメダ座所属の星であるとした。しかし二重所属であった時期が長かったため、未だにペガサス座とアンドロメダ座の両方を構成する星として扱っている文献もある。

『秋の大四辺形』は秋の星座を見つけるのにも役立つ。シェアトからマルガブへの星座線を伸ばしていくと、みなみのうお座の一等星・フォーマルハウトを見つけることができる。また、エニフから伸びるアンドロメダ座の星座線を伸ばしていくと、ペルセウス座のアルゴルを見つけることができ『秋の大四辺形』のエニフ、アルゲニブ、シェアトを覆うように黄道十二星座のうお座を見つけることができる。このように『秋の大四辺形』は星座を見つける導となるのである。

# アンドロメダ座



『秋の大四辺形』を構成する星を所持し、場所を見つけることは容易である。しかし構成する星が暗いため全体図を結ぶことは難しい。しかし、肉眼でも確認することができるアンドロメダ銀河は見どころがあると言えるだろう。

星座絵はギリシャ神話に登場する美しい女性・アンドロメダ姫が描かれている。アンドロメダ姫は両親の過ちのせいで化けくじらに生贄として捧げられそうになるが、たまたま通りかかった勇者・ペルセウスに助

けられ、そのままペルセウスと結婚して幸せに暮らした女性である。運命の人と出会えた女性の例としては最適である。

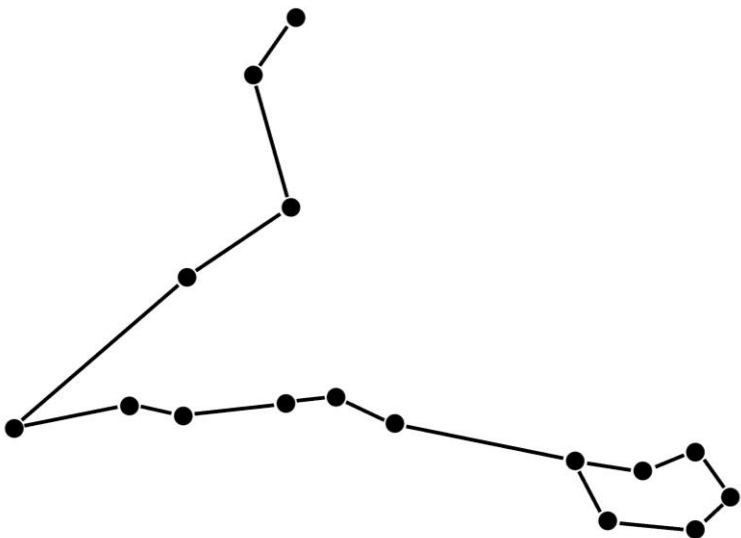
## M31・アンドロメダ銀河

アンドロメダ銀河は、好条件の町明かりの少ない夜空なら、肉眼でもその存在を確認することができ、また市販の双眼鏡で、よりその姿をはっきりと観ることができる。それもそのはず、アンドロメダ銀河は肉眼で見ることができる最も遠い天体であるとされており、銀河群の中でも一番の大きさを誇る渦巻き銀河なのである。ちなみにこの銀河群には天の川銀河も所属しており、名前を局部銀河群という。また最古の英語百科事典、ブラタニカ百科事典ではさんかく座銀河、オリオン大星雲と並んで、肉眼で見ることのできる三大星雲（当時、アンドロメダ銀河は星雲であるとされていた）であるとされた。

## うお座

『秋の大四辺形』の南東部を囲うように存在する黄道十二星座。位置はわかりやすいが、暗い星が多いことと、『秋の大四辺形』が明るいことからはっきりとうお座を確認するのは難しい。

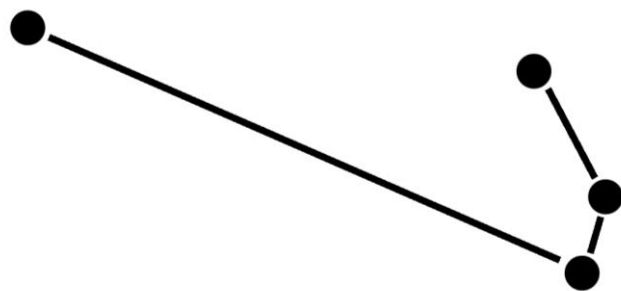
星座絵は二匹の魚が紐で繋がれている姿が描かれている。ギリシャ神話で、この二匹の魚は美の女神・アフロディーテとその息子、愛の神・エロスが怪物・テュフォーンから逃げるために変身した姿であるとされている。その逃げる時に、離れ離れにならないようにと紐で結んだとされている。美しい親子愛である。



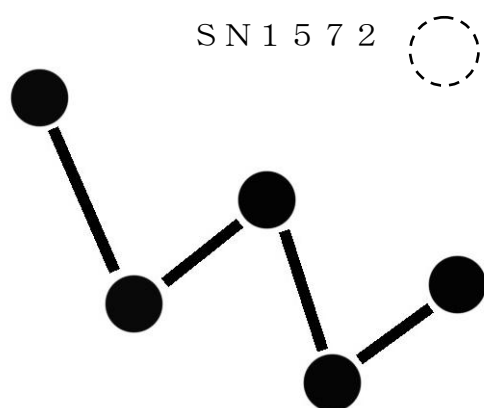
## おひつじ座

うお座の東側に位置するあまり目立たない黄道十二星座。最も明るくて二等星なのでなかなか結びにくい。周りに明かりのない、空気の澄んだ秋、または冬の夜空ならうっすらと観える、というくらいである。

星座絵はその名の通り羊の姿を表している。ギリシャ神話でこの羊は体が金色の毛で覆われている羊で、自分の子供たちを助けてほしいと強く願った母親の祈りが天に届き、大神・ゼウスがその子供たちを助けるために遣わした羊であるとされている。子を思う親の気持ちというものは、とても強いものなのである。



## カシオペア座



秋だけに限らず、ほぼ一年中北の夜空で確認することができる英語の「W」の形をした星座。明るい星も多く、きれいに観ることができる。また、この星座は北を示す北極星を見つけるのによく使われている。「W」の両側の「／」をそれぞれ伸ばしていき、その交点と「W」の真ん中の星を結び、ちょうど五倍伸ばしたところにある星が北極星である。

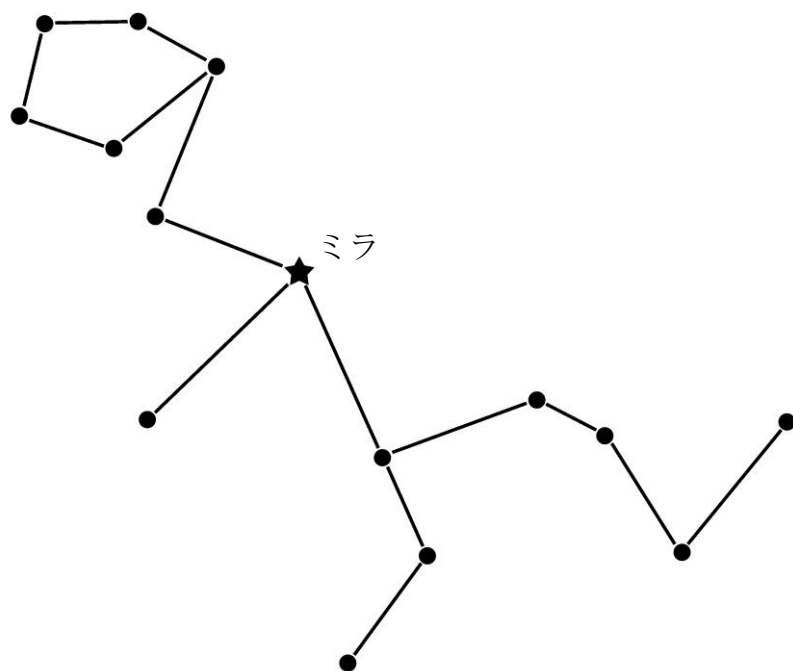
カシオペア座の星座絵は王妃の姿が描かれている。ギリシャ神話では、カシオペア王妃として、夫である古代エチオピア王国の国王・ケフェウス王と娘・アンドロメダ姫とともに古代エチオピア王国を治めていたが、ある日、自分の娘と海の妖精であるニンフたちの美しさを比べた事により、海神・ポセイドンの怒りを買って、アンドロメダ姫が生贄になるきっかけを作った人物である。その後はあまり奢るような態度は取らなくなったという。

### S N 1 5 7 2

一五七二年にデンマークの天文学者ティコ・ブラーエが発見したことで有名であり、この超新星残骸はティコの星と呼ばれている。超新星爆発によって起こった衝撃波によって宇宙物質と区切られ、恒星からの噴出物と星間ガスでできている。一見すると星雲のようにも見えるが、星雲のように周りに広がってはおらずまとまっている、という印象がある。



## くじら座



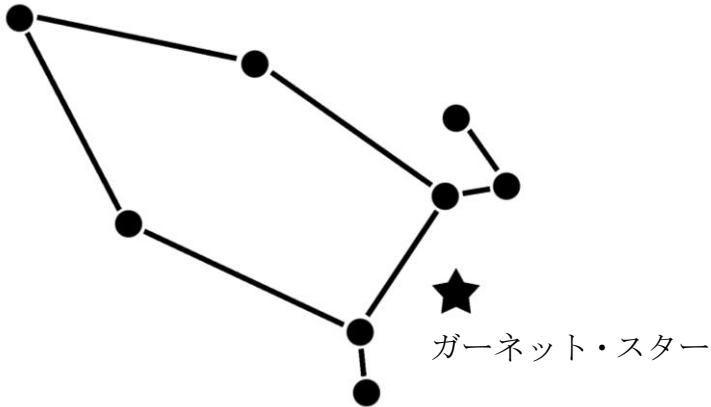
秋の南の空にある全天で四番目に大きい星座。しかしあまり明るい星は少なく、全体像は結びづらいが、晴れた日の街明かりのない夜空なら、きれいに観ることが可能。

くじら座の星座絵は、私たちのよく知るくじらの姿をしておらず、もはや怪物と言える生物である。ギリシャ神話で、この怪物は海神・ポセイドンの使いで、生贄として鎖で張付けられたアンドロメダ姫を食べようとしていたところ、通りすぎた勇者・ペルセウスの持っていた怪物・メデューサの首の目と目が合ってしまったことで、たちまち石になり、海の底へと沈んでいったという、少し見かけだけなところがある怪物である。しかし、やはり怪物の名残からか、秋の夜空の南の領域の多くを占めている。

### 変光星・ミラ

ミラは最初に発見された変光星である。変光星とは周期的に明るさの変わる星のことであり、ミラの変光周期は約三三〇日である。見かけの等級は約二等星から約十等星へと変わり、一年が経つといつの間にか星が一つ消えたかのように観える。

## ケフェウス座



カシオペア座とこぐま座の間にある少しいびつな五角形。暗い星が多いため、カシオペア座とこぐま座の明るさに少し負けてしまうが、位置は比較的わかりやすい星座。

星座絵は王冠を被った王様の姿が描かれている。ギリシャ神話で、この王は古代エチオピア王国の国王・ケフェウス王であり、

カシオペア王妃の夫であり、アンドロメダ姫の父親である。神話では、国王としての威厳のある姿より、生贄になりそうになる娘を必死に守ろうとする、どこにでもいる父親の姿が描かれている。ちなみに星座絵でのガーネット・スターの位置は、国王の被る王冠があり、その点だけは、王の風格というものを感ずることができる。

### 赤色超巨星・ガーネット・スター

ガーネット・スターは望遠鏡や双眼鏡などで観ると綺麗な赤色をしており、そのことから美しい赤色の花の名前としてガーネットが比喩されるほどの星である。三等星から五等星に明るさが変わる変光星であり、五等星の状態が周期的に多いため、星座を構成する星として含まれるときもあれば、含まれないときもある。

## こうま座

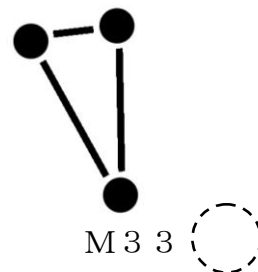


四等星以上の明るい星はなく、さらにみなみじゅうじ座に次ぐ小ささであるため、おそらく八十八星座中最も見つけることが難しい星座であろう。

星座絵はこうまの姿全体が描かれているわけではなく、馬の頭の部分だけが描かれている。なので、こうまなのかどうなのか、と問われると少し答えに窮する星座である。ギリシャ神話はないが神話学者たちは複数の説を見出しており、近いうちに神話が制定される日が来るかもしれない。

## さんかく座

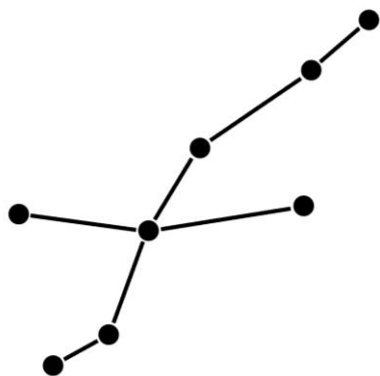
アンドロメダ座とおひつじ座の間にある星座。あまり明るい星はなく、三等星と四等星から構成されているが、秋は比較的明るい星が少ないこともあり、街明かりの少ないところなら観ることも十分に可能であるが、星座の大きさでは下から十番目と大変小さな星座であるため、少し観づらいかもしれない。



### M33・さんかく座銀河

この銀河は天の川銀河と同じく、局部銀河群に所属している。さんかく座銀河はうずまき銀河である。最古の英語百科事典、プラタニカ百科事典ではアンドロメダ銀河、オリオン大星雲と並んで、肉眼で見ることのできる三大星雲（当時、さんかく座銀河は星雲であるとされていた）であるとされた。しかし、現在では街明かりのない山でしか観ることができなくなってしまった。発展とともに、失われたものもあることを忘れてはいけないのである。

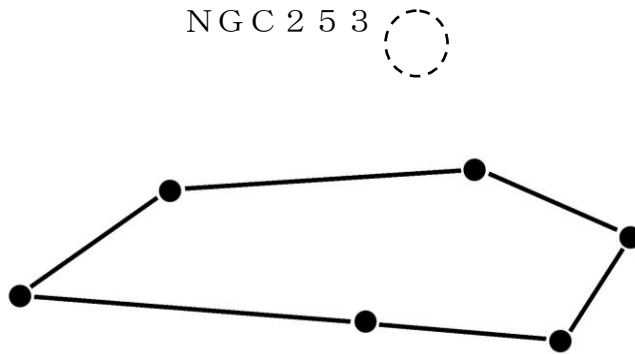
## つる座



南天の星座とも秋の星座と区分される秋の南の空にある星座。南の方にあるので南半球よりの場所では、その全貌を観ることはできない。つる座は、かつて、みなみのうお座の一部とされており、アルナイルという星はアラビア語で明るいものを意味するものであるが、魚の尾の中での明るい星という意味もあるとされている。また、初期はつる座とは呼ばれずフラミンゴ座とも呼ばれていた。

現在での星座絵は、つるのような鳥を描いた星座絵ではあるが、フラミンゴ座であったときの星座絵も一度は見てみたいものである。

## ちょうこくしつ座



秋の南の空にある細長い多角形の星座。あまり大きくなく、明るい星も少ないためなかなか結ぶことは難しい。しかし、この小さな星座の中には『銀河南極』というものが存在する。

『銀河座標』というものがある。これは、天球上の天体の位置を示す天球座標系の一

部で銀河中心と銀河面を基準とする座標系のことである。地球で緯度や経度を用いて国の位置を知ったりすることと似た感じのものである。その銀河座標の中で地球から見て南側にある点を『銀河南極』と呼ぶ。

ちょうこくしつ座の星座絵は、その名の通り彫刻室の風景が描かれている。彫刻、それを置く台、彫刻具、制作台など調べればパターンは数多くある。彫刻だけが描かれているものもあり「ちょうこくしつ座というよりちょうこく座と呼ぶのがふさわしいのでは？」と思える星座絵もある。

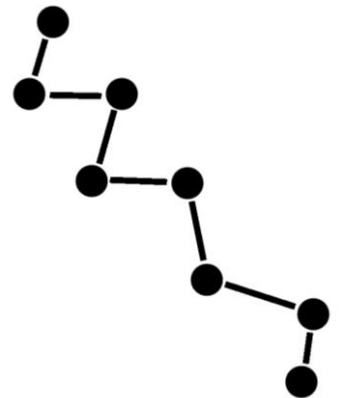
## NGC 253・ちょうこくしつ座銀河

大変明るい中心核を持つことで有名で市販の双眼鏡でも観測が可能である。ちょうこくしつ座銀河は渦巻銀河であり、太陽の十倍以上の質量を持ち、恒星を約千万年で生成するため爆発的星生成銀河とも呼ばれている。

## とかけ座

ペガスス座の西側からケフェウス座のちょうど間を埋めるようにあるジグザグした形が特徴的な星座。場所は比較的わかりやすいが、あまり大きくなく、さらには明るい星もないため、少し見つけづらい。

星座絵はその名の通りトカゲの姿が描かれている。ヨハネス・ヘヴェリウスというポーランドの天文学者が発見した。発見されたときはいもり座と言われていたが後にとかけになったと言われている。

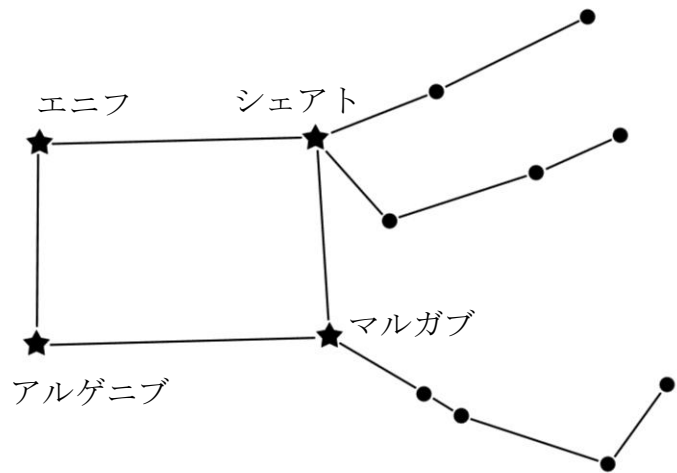


# ペガサス座

秋の夜の空を代表する星座。天頂付近に存在する大きな四辺形が見えたら、ペガサス座の一部であると考えてよい。この大きな四辺形は『秋の大四辺形』または『秋の四辺形』『ペガサスの大四辺形』『ペガサスの四辺形』と呼ばれる星の並びである。この四辺形を中心として秋の星座は集まっているといっても過言ではない。また四辺形を構成する四つの星の内、

エニフはアンドロメダ座の星であるが、元はペガサス座とアンドロメダ座のどちらにも属する星であったため、多くの文献では未だ後者のときの星座点が使われている。

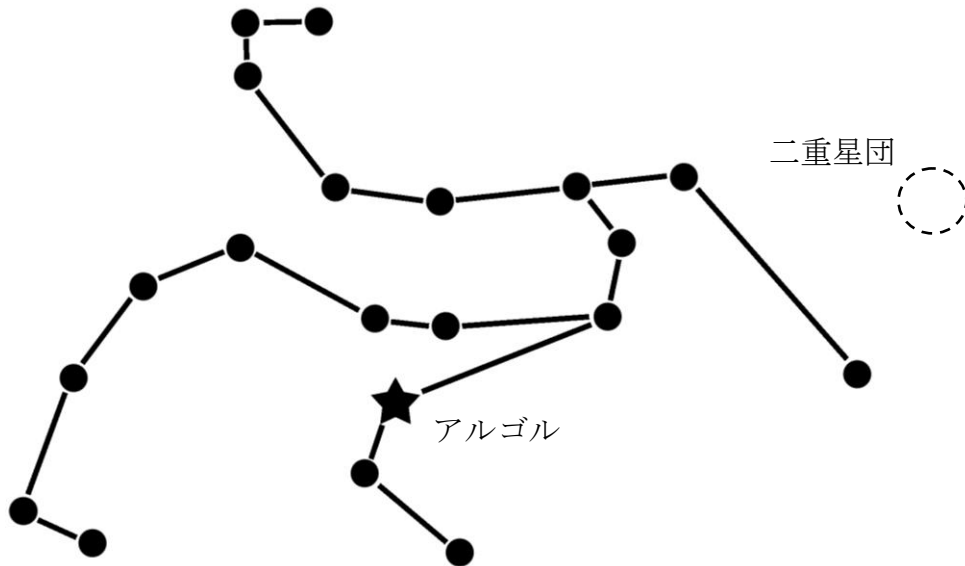
ペガサス座はギリシャ神話上では羽の生えた馬、ペガサスという幻獣のことを指す。この幻獣は、勇者・ペルセウスが見たものを全て石に変えてしまうという怪物・メデューサを倒した時に飛び散った血から生まれたと言われている。その後は諸説あり、ペルセウスのお供としてついて行ったという説もあれば、勇者・ペルセウスのあとは勇者・ベレンボーンの使いとなり、天にベレンボーンを連れて行こうとしたが、大神・ゼウスの遣わせたわせた蛇を嫌がり、ベレンボーンを落としてしまう説もある。ちなみに後者の説の後には大神・ゼウスの雷電の矢を運ぶ役目をしたと言われている。キャリア豊かなペガサス座の星座絵はペガサスの上半身の絵が描かれている。その姿は勇者を乗せただけあって、雄々しく描かれている。



## アインシュタインの十字架

究めて明るく輝くため内部構造が見えない天体・クエーサーから地球に届く光が、重力によって捻じ曲げられて光が複数に見えるという重力レンズ効果を受けている天体のこと。簡単に言うと光源は一つだが、見えるときには複数の光りが見える天体。これが十字架状に見えるため、アインシュタインの十字架と呼ばれている。リング状のものもあり、そちらはアインシュタインリングと呼ばれている。

# ペルセウス座



ペガサス座からアンドロメダ座へと目を移した先にある星座。秋の星座の中では比較的明るい星座ではあるが、末端は暗い星で構成されているため、少し結びづらい。しかし食変光星アルゴルやカシオペア座とのちょうど間に位置する二重星団は大変美しい。

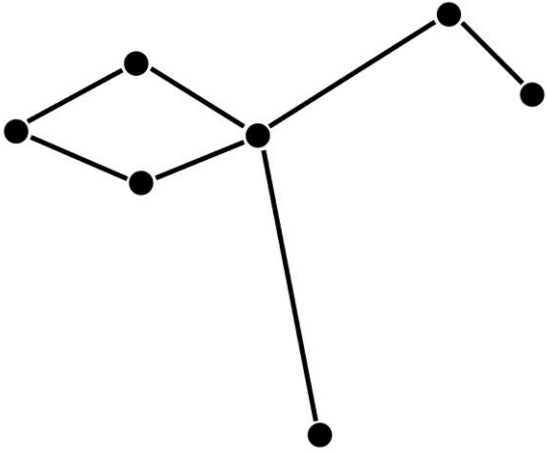
また、ペルセウス座の方から流星群が観測されることでも有名である。ニュースなどでも報道されるその流星群はペルセウス座流星群という。毎年七月下旬から八月中旬ごろに出現する流星群で、しぶんぎ座流星群、ふたご座流星群と並び、年間三大流星群の一つに数えられている。

ペルセウス座の星座絵はギリシャ神話の勇者・ペルセウスの姿と怪物・メデューサの首が描かれている。神話上で勇者・ペルセウスは、自国の王の命を受け、怪物・メデューサを退治した勇者として有名である。退治した後、倒した証拠に首を切り取った。そのときに血が飛び散り、岩に付着した血からペガサス座の元となったペガサスが生まれたとされている。その後、自国へと変える途中に、岩にはりつけにされ、くじら座のモデルとなった怪物に食べられそうになっているアンドロメダ姫を助け、それがきっかけで結婚し、二人は仲良く暮らしたとされている。自国に帰ってないという本末転倒な感じではあるが、二人が幸せならば、それでいいのではないだろうか。

## 食変光星・アルゴル

アルゴルは食変光星という文類の変光星である。食変光星というのは二つの公転し合う星が地球から見たとき、一直線上に並んだ場合に明るさが異なって見える星のことをいう。また、このようにお互いの重力で公転し合う二つの星のことを連星という。そのため、アルゴルのことを食連星という場合もある。

## ほうおう座



秋の南の夜空に現れる星座。つる座と同じく南天の星座に区分されることもある星座。全体的に暗い星が多く見つけにくい星座ではある。しかしそもそも日本からでは観るのが大変に困難であるため、南半球の国へと旅をしに行った時などに観ていただければ幸いである。

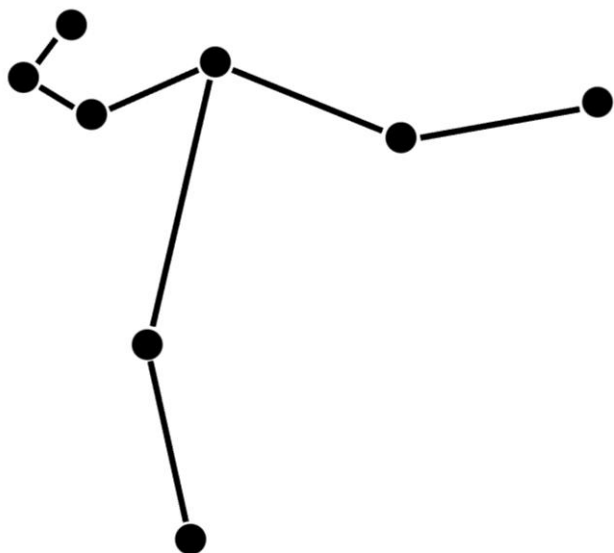
ほうおうは、鳳凰とされることが多いが、本来は不死鳥（フェニックス）という幻獣を指しているとされている。そのため、星座絵は雄々しき不死鳥の絵が描かれている。

ほうおう座にはあまり知られていないが、初めて発見された中間質量ブラックホールがある。ブラックホールはその質量によって名前が分けられている。太陽質量の十～数十倍を恒星質量ブラックホール、質量が太陽質量の数百倍以上のものを超大質量ブラックホールという。中間質量ブラックホールとはちょうどその間を占める質量のブラックホールのことを指すブラックホールである。

ほうおう座は「不死鳥（フェニックス）を指しているとされている。」とあるがこれはキリスト教の影響を強く受けているためとされている。他にも、はと座はノアの箱舟で登場するノアに洪水を知らせる鳩を表しているとされている。

突然キリスト教がでてきて驚くかもしれないが、実はキリスト教に関わりの深い星座は過去に多くあったのである。ルターが宗教改革を行った同時期にイエズス会のシラーという人物が、ノアの箱舟座やキリストの十字架座などといった星座を制定していたのである。しかし、後に国際天文連盟によってなくなってしまった。なくなってしまった星座を調べたり、キリスト教以外にも宗教に関わる星座がないかを調べたりするのも星座を楽しむ一つの術である。

## みずがめ座



秋の南の夜空にある黄道十二星座。みなみのうお座を囲うように存在するので、みなみのうお座を見つけることができれば比較的容易に位置は把握できる。しかしあまり明るい星がなく、みなみのうお座の一等星・フォーマルハウトによって観えにくいので、全てを結ぶのは困難である。

みずがめ座を構成する星は幸せを求めるものが多い。サダルメリクはアラビア語で王の幸運、サダルスウドはアラビア語で最高の幸運という意味である。また、サダクビアは守り神という意味を持っている。これらが見えたとき、何かいいこ

とが起こるのだろうか。

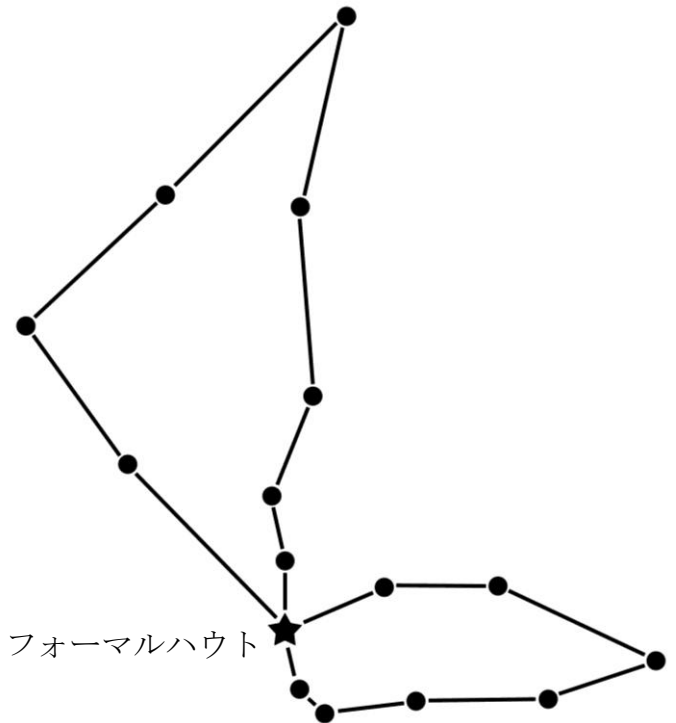
ギリシャ神話は、美少年ガニメデスの誘拐事件が書かれている。ガニメデスは酒を注ぐ給仕係りを神界で行ったため、その姿が星座絵としてえがかれ、右手に大きな水瓶を持っているとされている。



## みなみのうお座

秋の南の夜空に位置する星座。みなみのうお座を構成する星の一つ、秋の夜空の唯一の一等星・フォーマルハウトは秋の夜になんとなく星を見上げて南を見ればわかるくらい目立つので、見つけることは大変容易である。しかしそのほかの星はあまり明るくないため、星座線を結ぶのは少し難しい。

星座絵は流れる水とそれを飲む魚の姿が描かれている。この流れる水はみずがめ座が持つ水瓶からでており、このことから流れる水はみずがめ座の区分であるとする文献もある。しかし、どちらの場合でも魚が流れる水を飲む姿は変わらない。また、この魚はうお座の親魚であるとされている。



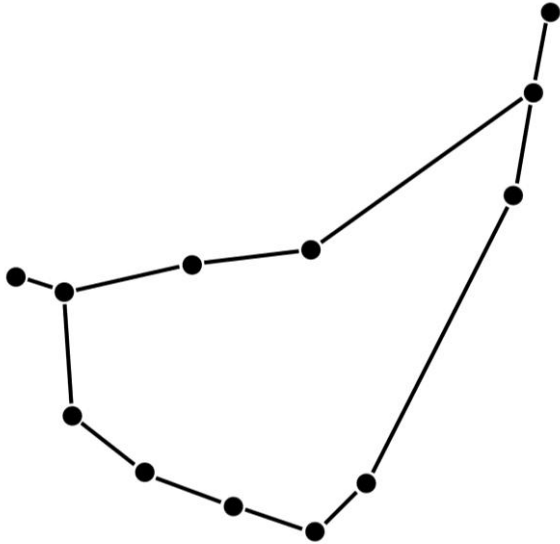
### 一等星・フォーマルハウト

フォーマルハウトは全天二十一の一等星のうちの一つ。秋の一つ星と呼ばれている。みなみのうお座のちょうど中心に位置し、星座絵では流れる水を飲む魚の口に位置する。秋の一つ星の名にふさわしく、秋の夜空にポツンと一つ光っているのが特徴である。『秋の大四辺形』のシェアトからマルガブへの星座線を伸ばした先で見つけることができる。

## やぎ座

みずがめ座のすぐ西側に位置する黄道十二星座。しかし全体的に暗い星が多いため観るのは少し難しい。元は冬至点がやぎ座にあったが、現在はいて座にある。

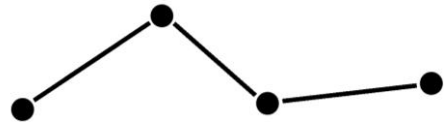
ギリシャ神話ではパンという少年が怪物・テュフオーンから逃れるために魚に変身しようとしたところ誤って、上半身は山羊、下半身は魚に変身してしまい、その姿が天に上げられたとされている。そのため、やぎ座の星座絵は上半身が山羊、下半身が魚という不思議な生物を表している。



## ろ座

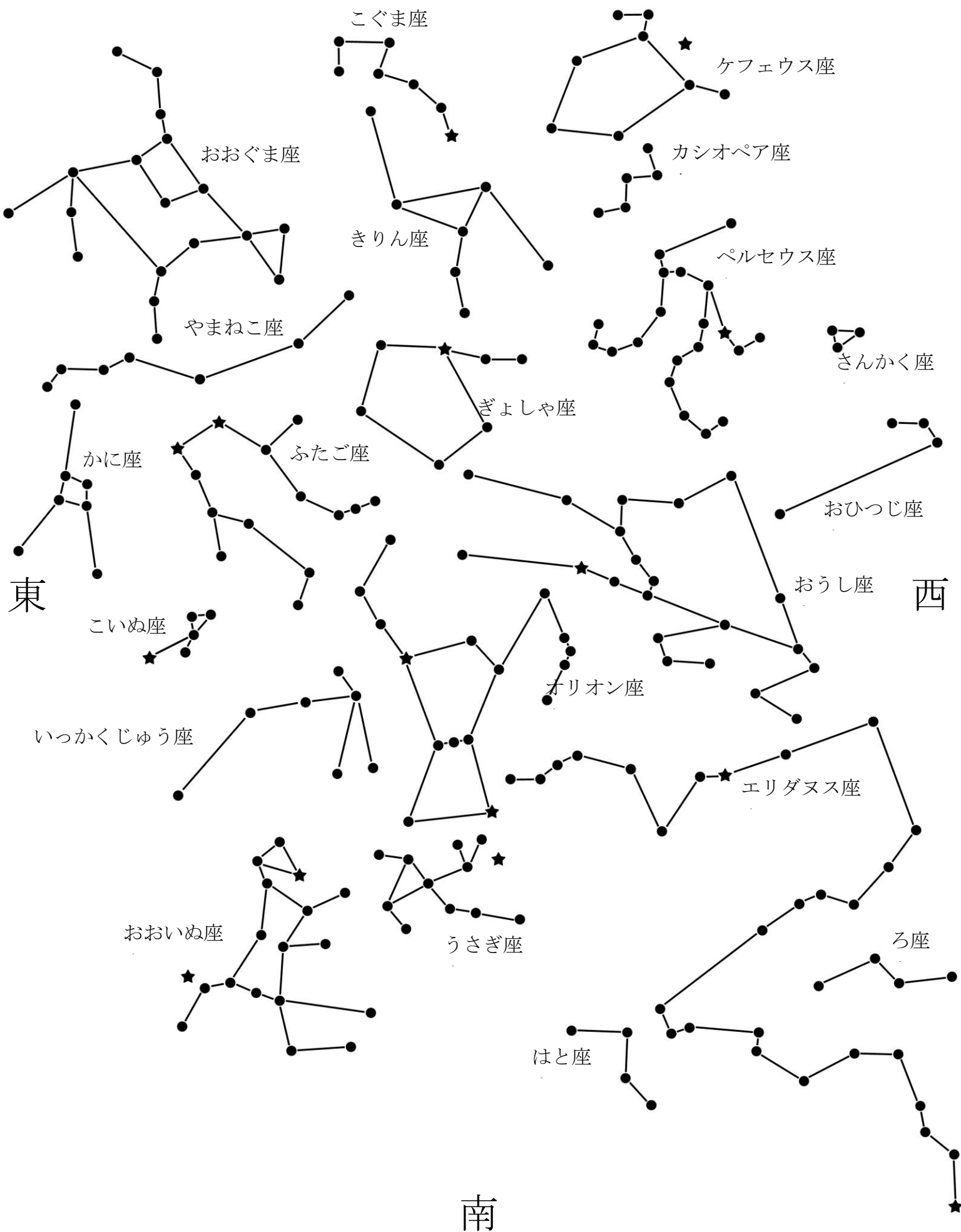
くじら座のさらに南に位置する星座。明るい星がないため結ぶことはなかなか難しい。目立った天体もあまりなく、少し寂しい星座。しかし、ろ座ボイドやろ座ウォールという大規模構造が確認されているため、これから解明、観測などが進んでいけば秋の夜空の一角を担えるような星座として有名になるかもしれない。

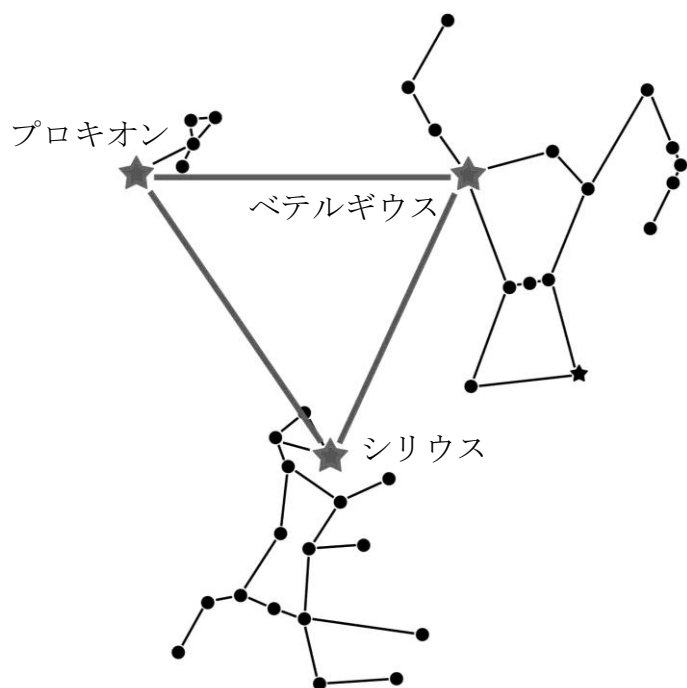
ニコラ・ルイ・ド・ラカーユによって制定されたこの星座は、フラスコを加熱するための炉の姿が描かれているらしいが、現在の文献によってはかまどや、調理場のような姿が描かれているものもある。





北





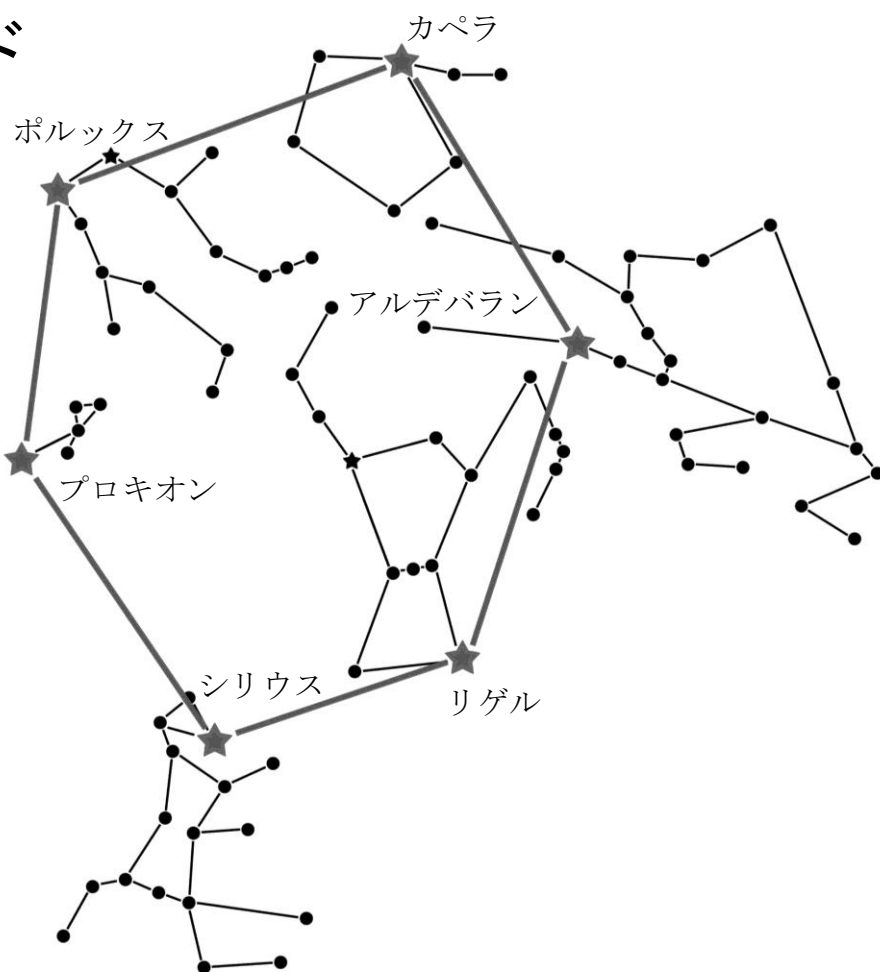
## 冬の大三角

オリオン座のベテルギウス、こいぬ座のプロキオン、おおいぬ座のシリウスを結んだ三角形。ここでの三角形は少しいびつかもしれないが、実際の夜空で観ると正三角形ともいえるくらいに綺麗な三角形を描いており、その姿は肉眼でも観測できる。また、冬の大三角が昇ってくるときに、木星もともに昇ってくることがあり、誤って木星を大三角の一つの点に含まないよう注意が必要である。

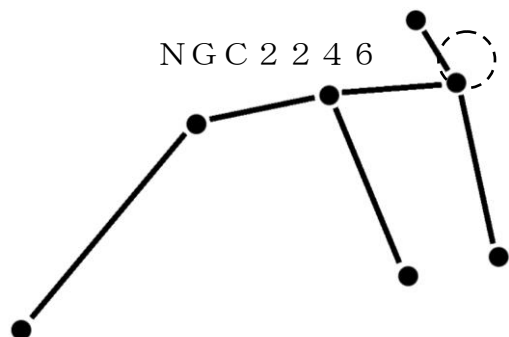
## 冬のダイヤモンド

オリオン座のリゲル、おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、ふたご座のポルックス、ぎょしゃ座のカペラ、おうし座のアルデバランから成り立つ六角形の星の並び。冬の夜空を彩る主要な星座が全て入っているため、観ていて楽しめる六角形である。

単体で楽しむのもいいが、こうして大きな一つの図形として観ると、また違った美しさを味わうことができる。



## いっかくじゅう座



おおいぬ座とこいぬ座の間に位置する星座。『冬のダイヤモンド』の近くに位置し、また、あまり明るい星で構成されてはおらず、結ぶのは大変難しい。しかし、この星座には多くの星団、星雲があり観測にはもってこいである。

星座絵で、いっかくじゅう座はギリシャ神話上で存在する架空の生物・ユニコーンの姿が描かれている。この星座が創られた時期はあまりはっきりとはしていないが一五〇〇年代であるという説もある。そんなにも過去に、ユニコーンという幻獣は生み出されていたのか、と思うと驚きを隠せない。

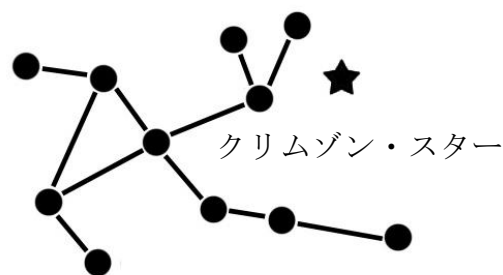
### NGC 2246・ばら星雲

ばら星雲は散光星雲であり、肉眼で観測することはできないが、望遠鏡などで観測すると、バラのように赤く美しい姿を観ることができる。写真に残しておきたい星雲である。

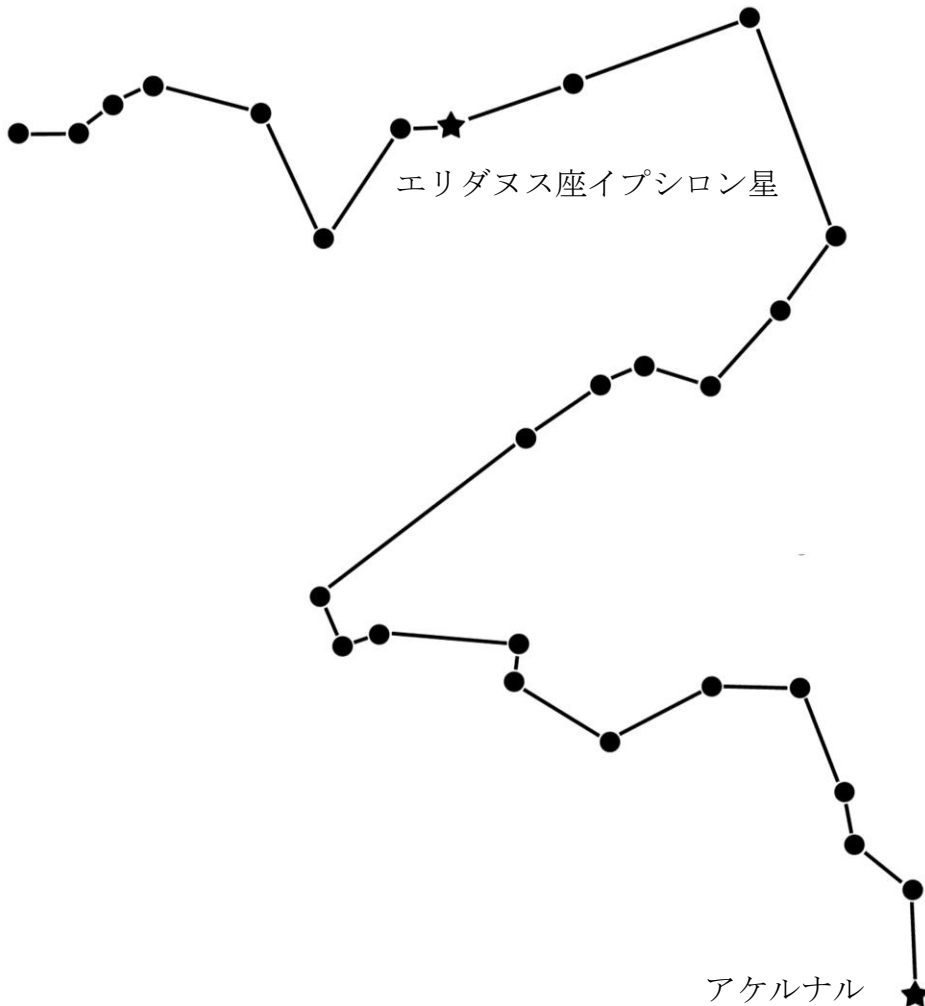
## うさぎ座

オリオン座の南に位置し、星座絵で見るとオリオン座に踏まれているかのように見える。オリオン座の一等星・リゲルやベテルギウスの明るさで少し見えにくい、比較的明るめの星が多いため、結ぶことは可能である。また赤色超巨星であるクリムゾン・スターがうさぎの赤い目のように観える。

パラティーノ図書館の図書館長・ヒュギーヌスという人物の話として、うさぎ座のもととなったうさぎはドデカネス諸島のレロス島に連れてこられた一匹の野兎が元であるとされている。レロス島にはもともとうさぎがおらず、島民はうさぎを大切に育てたところ、うさぎが大量に増えてしまった。その結果、島の作物に甚大な被害を受けた。そして島民はうさぎを全て殺してしまった。このことを戒めとして、この星座を作ったとされている。星座の物語はギリシャ神話のような神々が織りなす華やかな物語ばかりではないのである。



# エリダヌス座



オリオン座の西から南へと、漢字の「己」のような形で伸びている星座。大きさもなかなかのもので、大きさは全天で六番目。全天二十一の一等星のうちの一つ、アケルナルが星座の最も南に位置しているが、日本では九州や沖縄など、南部の方でないと観ることができない。

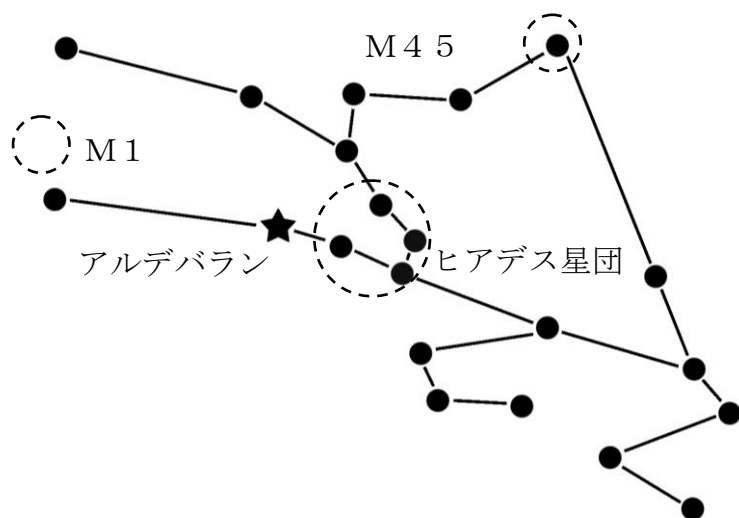
エリダヌス座は川を表している。モデルとなった川は諸説あり、有名なナイル川であるとする説や、イタ

リア北部を流れるポー川を指しているという説もある。ギリシャ神話でも川を表している。太陽神・ヘリオスの息子・パエトーンが父に会うために馬車に乗ったところ、操縦できず暴走してしまった。そしてそのまま暴走を放っておくわけにもいかず、大神・ゼウスが雷を落とし止めようとしたところ、パエトーンはその雷の衝撃で川に落ち、死んでしまったのである。このパエトーンの落ちた川がエリダヌス川であったとされている。

## エリダヌス座イプシロン星

存在が確実である中で、主系列星であり、太陽系に二番目に近い惑星系である。そのため、かつては知的生命体がいるかもしれないと考えられており、アメリカ国立電波天文台で始めた知的生命体探査の初めての取り組みであるオズマ計画のターゲットになっていた星。

# おうし座



『冬のダイヤモンド』の一角を担う一等星・アルデバランを有する黄道十二星座。『冬のダイヤモンド』の北西部にあり、M45プレアデス星団や赤色超巨星でもある一等星・アルデバランが目立つため、そこから大まかな位置を把握することはできる。しかし、星座が広範囲に伸びているため、全てを結ぶことは少し難しい。しかしこの星座は

有名な星や星雲、星団があるため、見応えはある。

星座絵はその名の通り牡牛の姿を表している。ギリシャ神話では、この牡牛は大神・ゼウスが泉の妖精・エウロパをかどわかすために変身した姿であるとされている。このとき、エウロパを連れ去ってたどり着いた島を、エウロパという名前を由来としヨーロッパと名付けられたとされている。

## M1・かに星雲

おうし座にあるがかに星雲という名前である。名前だけを聞くとかに座にあると勘違いしてしまいそうなので、気を付けなければならない。M1という名前は、この星雲はシャルル・メシエが一番目に発見した星雲だったことを表している。

## M45・プレアデス星団

星座絵でいうと、おうし座のちょうど背の部分に位置し肉眼でもぼんやりと観ることができ、市販の双眼鏡を使うと星が集まっている姿を確認することができる。またおうし座の背の部分構成する星座点でもある。

## ヒアデス星団

おうし座の頭部分に位置する星の集まりがヒアデス星団であるとされている。V字型の並びで存在しているため、日本では釣鐘星とも言われている。



## おおいぬ座

『冬のダイヤモンド』『冬の大三角』の一角を担う星座。全天二十一の一等星の一つ、シリウスを有している。シリウスは一等星の中で最も明るい星であるため、南の夜空を観るとすぐにわかる。しかし、シリウスが明る過ぎるため、他の星が見えにくく、結ぶのは少し難しい。

星座絵はその名の通り、犬の姿を表している。ギリシャ神話では諸説あり、テウメッソスの狐を追いかける神犬・ライラプスであるとする説と、オリオン座のもととなった狩人・オリオン所有の猟犬であるとする説がある。後者の場合は、おおいぬ座から少し西へと目を移した先にあるうさぎ座を追いか

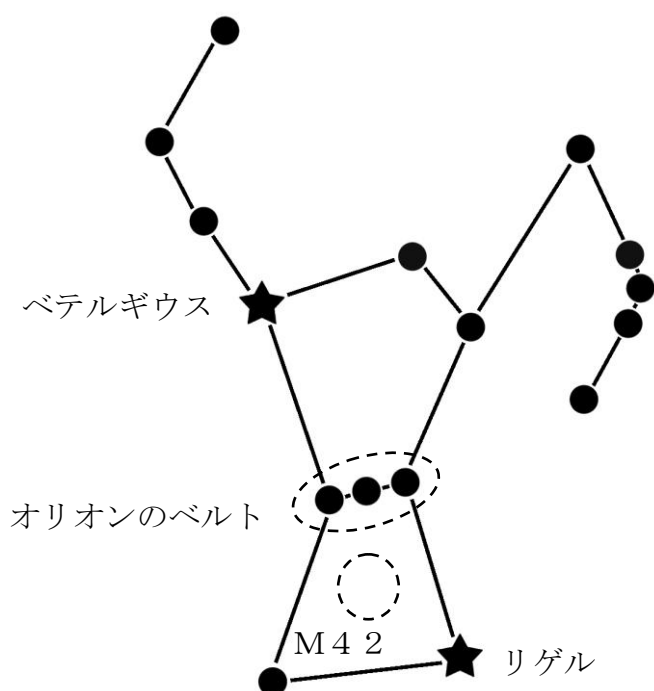
けているとされている。どちらの場合にしても、犬、猟犬としての務めを全うしている。

### おおいぬ座VY星

赤色超巨星で、その直径は太陽の一四二〇倍。比較動画などもインターネットの動画サイトで見ることができるが、圧倒的である。こんなにも大きな星が宇宙にあることを思うと、地球の小ささを痛感させられる。

## オリオン座

『冬の大三角』を構成する全天二十一の一等星の一つ、ベテルギウスと『冬のダイヤモンド』を構成する同じく全天二十一の一等星の一つ、リゲルを有する星座。八十八星座のうちの一等星を二つ有する三つの星座の一つという珍しい星座。星座の形は砂時計型として有名であり、知名度も高い星座。二つの一等星、目視可能な星雲、中心に位置する三つの連なった星の並び、通称オリオンのベルトと揃っており、見つけやすい星座である。

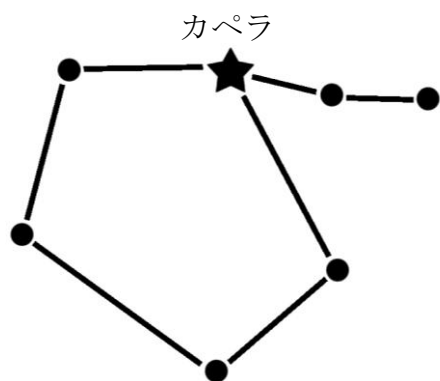


星座絵はギリシャ神話に登場する狩人・オリオンの姿を表している。このオリオンという狩人は大変強く、獣を多く狩っていた。そしてあるとき「自分に狩れない獣はいない！」と発言した。この発言は神々の怒りを買って、大地の女神・ガイアが放った蠍に刺されて殺されてしまった。その後、オリオンは天に上げられ星座となったが、星座となった今でも蠍を恐れ、さそり座が天に昇ってくると、逃げるように西の空へと沈んでいく。

## M42・オリオン大星雲

オリオン座の南側の囲われた部分の中心に位置する星雲。肉眼で観ることが可能。オリオン座を構成する星は全てこの星雲から生まれた。いわば生みの親である。また、最古の英語百科事典、ブラタニカ百科事典ではアンドロメダ銀河、オリオン大星雲と並んで、肉眼で見ることのできる三大星雲であるとされた。

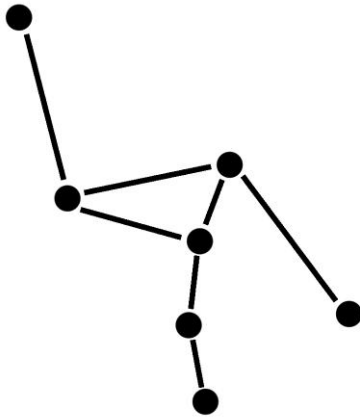
## ぎょしゃ座



『冬のダイヤモンド』の最北を担う星座。全天二十一の一等星のうちの一つ、カペラを有していることと『冬のダイヤモンド』に所属していることから位置を把握することは容易であるが、カペラ以外の星があまり明るくないため、その綺麗な五角形を観ることは難しい。

ぎょしゃ座の『ぎょしゃ』というのは、馬車などで馬を引く人のことを指す。漢字で書くと馭者。しかし、星座絵でもその姿が表されているかと思いきや、馬車が中心となっている。馬車と聞くと、馬で人を運ぶ乗り物というイメージがあるが、ギリシャ神話では足の不自由な王のために作られた馬車であるとされている。

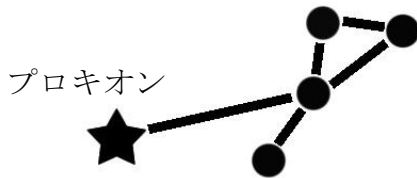
## きりん座



北に位置し、冬だけではなくほぼ年中夜空に存在する星座であるが、明るい星がないため結ぶことはなかなか難しい。星座絵ではその名の通りきりんの姿が描かれている。動物園にいるあのきりんである。

この星座ができたのは一六一三年と、比較的新しい星座のためギリシャ神話はない。しかし、旧約星座の創世記のアラム人女性・リベカが太祖・イサクに嫁ぐ際に登場したとされるラクダを記念したものと紹介されたため、一時期は、らくだ座と呼ばれていた。

## こいぬ座



『冬のダイヤモンド』と『冬の大三角』を構成する全天二十一の一等星のうちの一つ、プロキオンを有する星座。あまり大きくなく、プロキオン以外の星があまり明るくないため、結ぶことは難しい。

星座絵としては名前の通り小犬の姿が描かれている。ギリシャ神話は諸説あり、おおいぬ座と同じくオリオン座の元となった狩人・オリオンの猟犬であるとされる説と、狩人・アクタイオンの猟犬であるという説がある。後者の説の内容は、狩人・アクタイオンが猟犬を連れて狩りに出かけたとき、月の女神・アルテミスの水浴びを覗いてしまったために、アクタイオンはアルテミスによって鹿にされてしまう。そのことに気づかない猟犬は目の前の鹿を獲物だと思って殺してしまう。その姿を哀れに思い、その猟犬はこいぬ座として天に上げられたという説である。飼い主を気づかないうちに殺してしまうとは、少し心が痛いものがある。

## はと座

うさぎ座の南、おおいぬ座の南西に位置する星座。あまり明るい星がなく、小さく南の方に位置するため、観つけることはなかなか難しい。

星座絵はその名の通り、鳩の姿を描いている。この鳩は聖人・ノアに大洪水が起こることを知らせた鳩であるとされている。



## ふたご座

『冬のダイヤモンド』を構成する全天二十一の一等星うちの一つ、ポルックスを有する黄道十二星座。ポルックスだけではなく、二等星・カストルも有し、二つが並んでいるため大変見つけやすい。ポルックスとカストルは間違えることが多い。ポルックスは東側、カストルは西側である。

星座絵はその名の通り双子の男性の姿が描かれている。カストルが兄でポルックスが弟である。ギリシャ神話では美しい兄弟愛が描かれている。その神話通り、仲睦まじい物語が描かれているかと思いきや、途中からは少し物悲しい物語が描かれて

いる。もし機会があれば一読していただきたい。

### 二等星・カストル

カストルは一つの星だと思われがちだが、実際はカストルA、カストルB、カストルCという三つの連星から構成されている。さらにそれぞれの星は連星であるため、カストルは実質六つの星から成り立っているということである。一つに見えるものが実は違う。夜空はそんな神秘性を秘めているのである。

28

# 参考文献

『星空の神々 全天88星座の神話・伝承』長島昌裕 著 親紀元社 一九九九年

『春・夏・秋・冬・南天 星座・星雲・星団ガイドブック』八板康磨 著 新星出版社 二〇〇〇年

『秋の星座博物館』山田卓 著 地人書館 二〇〇〇年

『冬の星座博物館』山田卓 著 地人書館 二〇〇〇年

『星座の事典』沼澤茂美／脇屋奈々代 著 ナツメ社 二〇〇七年

『星座の見かたがわかる本』藤井旭 著 誠文堂新光社 二〇〇七年

『星の伝説がわかる本』藤井旭 著 誠文堂新光社 二〇〇八年

『改定新版 全天星座百科』藤井旭 著 河出書房新社 二〇一三年

## 後書き

いかがでしたでしょうか？秋は『秋の大四辺形』から多くの星座を見つけることができ、冬は『冬のダイヤモンド』や『冬の大三角』と多くの一等星が夜空を彩っています。涼しくなる季節ですが、天気の良い日は夜空を観に行ってみてください。そのときにこの冊子が皆さんの観測をよりよいものになれば、本望です。

制作者 Nakamura

発行 天文サークル 星宿

<http://hoshiyado.com/>